

KOKONOE
FreePaper

2021.10
vol.14

BASARE

九重からここのえへ

令和2年7月豪雨の記録

令和2年7月豪雨災害概要
九重町の被害

座談会

あの日を語る座談会での声/あの日
東飯田地区・野上地区・飯田地区・南山田地区

消防団・防災士の動き

災害復旧工事の現状

ボランティアの存在

手記 あの日のこと



はじめに

令和2年7月豪雨により九重町でも全域で大きな被害を受けました。災害により、生死に関わる体験をされた方が多くいらつしやり、体験時の恐怖や絶望感が蘇ってしまうことから、災害の報道を見ることができないと言われる方とも出会いました。家、田畑、家畜、地域、ふるさと、風景など、様々なものを失いました。被災された皆様方に心からお見舞い申し上げます。

そのような中でも、命を失う方がいなかったこと。これは奇跡ではなく、多くの人が動き、人のつながりがあったからだとなりました。

今回のBASARE14号は、九重の人・まちで助け合い、応援してくれた皆様に感謝の気持ちを伝えたいと思います。取り組みました。

災害から1年。住み慣れた家の解体が始まり、あらゆる工事が続く私たちの町に、どんな災害が起きたのか。わからないことやどうにもならないことが多くある中で、1年後の今の歩みを伝えることで、九重の人・まちの力につながることを願って、発行します。

概要

7月3日から梅雨前線が華中から九州付近を通って日本付近に停滞し、特に7月4日から7日までは前線の活動が活発で九州に記録的な被害をもたらしました。気象庁によると大分県内は、7月中の総降水量が県内の多いところで、七〇〇ミリを超え、24、48、72時間の時間降水量が観測史上の1位を超えるなど、河川の氾濫、土砂災害や浸水被害を各地に与えるものでした。後に日本各地に被害を与えた集中豪雨を気象庁は「令和2年7月豪雨」と命名しました。

九重町の被害

九重町では7月6日の15時頃より雨量が増加し始め、翌7日の3時頃に1時間当たりの降雨量が80ミリ近くに達し、明け方6時頃まで雨が降り続けました。その後、一旦、雨量が減ったものの、夕方再び雨量が増加。8日の19時26分に警報が解除されるまでの間、累加雨量が八〇〇ミリ(日田観測地点)を超えるものでした。

この雨の被害は全壊7戸を始めとして、多くの地区で断水が生じ、道路では国道三〇号線ほか多くの主要な道路が通行止めとなり、久大本線の被災は復旧が翌年3月1日になるなど甚大ものでした。



座談会

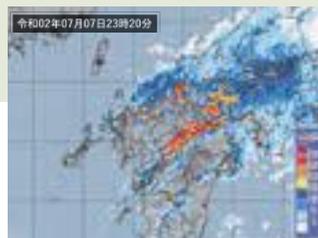
令和3年7月、4地区公民館で「災害が起こったあの
日を語る座談会」を開催しました。

区長文書で参加を呼びかけたところ、4日間開催し
た座談会に、延べ16名の方にご参加いただきました。

座談会では、各地区のハザードマップを広げ、当時の
状況、個人の体験談、1年経った現在の状況について、
お話しいただきました。また、当時の写真もお寄せい
ただきました。その座談会でいただいた情報をもとに、
住民の生の声を抜粋して掲載する形で、BASARE
14号を構成しています。

座談会の場にまだ出る気持ちになれなかった方、都合
のつかなかった方も、いらつしゃると思います。そのため、
紙面で紹介させていただく声は、二部の方の声かもしれ
ませんが、全てが現実です。

他の人の声を読んで、自分も話したいと思われた方
は、座談会は終わりましたが、いつでも公民館までお話
しに来られてください、お待ちしております。



東飯田地区

野上地区

あの日を語る 座談会での声

飯田地区

南山田地区

避難所の屋根に
大粒の雨が当たる音が怖かった。

夜、怖くて眠れなかった。

助けてと
言えるかが
大事。

橋に流木がひっかかり、
行き場のない水が民家に流れこんできた。

避難指示には素直に従って
明るいうちに避難することを
心がけようと思った。

自分の所より被害を受けた人がいるだろうから、
できる限りのことは自分で復旧しようとした。

道が寸断、上へも下へも
どこにも行くことができず、
3日間孤立した。

昔の災害で
危険な箇所は把握できていたので、
遠回りして安全な道を進むことができた。

山の土砂崩れが多かった。

鳴子川の護岸が崩れ、
田んぼが川になった。

まだ大丈夫と思ったときに
避難するべきだった。

二本の水路が交わるところで、
とても人力では動かせないような
蓋が上がっていた。

近所の家が解体され、
今までとは違う風景が広がっていて
さみしい気持ち。

川の音と、壊れた踏切が薄暗い中
ずっと鳴り続け不気味だった。

再び災害が起きるのは
ないかと不安になる。



**地域住民の助けあいが必要、
いざというときに動けるように。**

避難所で給食ボランティアの方が
率先して食事を配ったり、
ご高齢の方に声をかけていた。
(避難所の様子)

靴が流され、
数日間スリッパで過ごした。

避難後、雨が止むことを
ずっと祈っていた。

飯田で大雨が降ると一時間後、
筑後川が増水する。

**公助ばかりに頼るのではなく、
自助・共助もしっかり行う。**

前日はあまり大したことないという感覚だったが
朝起きてカーテンを開けてみると、
家自体が川の中に、という状態になっていた。

5分遅かったら流されていたと思う。

上の山から水が
どんどん流れてきた。

50年に一度の災害が近年至る所で発生している。
いっどこで災害が起こるか分からない。

職場の確認に行こうとしたが、
土砂崩れ通行止めで断念。

スーパーから
食料品や
生活用品が
無くなった。

**地域の温かさに
助けられた。**

避難者の方に社協がお風呂を貸してくれた、
その後も民間の方がお風呂を無料開放して
くれた。
(避難所の様子)



いつもの景色が、変わった。

避難の時は2～3日分の食料は
持っていくようにした方がよい。

家から離れるのが
怖かった。

朝6時に目が覚めて目の前の川を見たが
少し水位が上がっただけだったので
「まだ大丈夫だろう」と判断。

夜中、雨の音で危険を感じた。

その後雨の量が増え川の勢いも激しくなり
あっという間に 水嵩が増した。

家族と話し合って動かせる家具を2階に運んだ。
運び終えた頃、川が氾濫した。

氾濫し始めてからはあっという間だった。

恵良駅前の通りのアスファルトが
ボコボコと持ちあがっていた。

近所の人達と
一緒に避難した。

行く道、行く道、
土砂崩れなどで
道が通れなかった。

飯田地区は標高が高い位置にあるので
特に気候が特異である。

家の前が湖状態

になった。
2階から瓦をつたって避難した。

家の前の橋が無くなり
道に出られなくなったので、
裏山を何往復もして荷物を運び出した。

今まで体験したことがない雨だった。

避難所で配られたペットボトルの水をずっと飲まない
ご高齢の方がいました。気になって声をかけてみると
ペットボトルのフタを開けることができない、ということ
をそこで知りました。避難所での声かけがもっと細かく
出来るならと思いました。

(避難所の様子)

地区ごとに安全な避難所を
見つけておいたほうがよい。

線状降水帯が発生したとき、九重山系の雲が低かった。

避難して何事もなく終わって「これなら避難せんでよかったやん」と思うのではなく、「何事もなく終わってよかった、良い避難訓練にもなった」と思えるようになりたい。

「うちは後でいいけん大変なところを先に行きよ」と、田舎の人の譲り合いの精神を感じた。

大変な状況になると周りが見えなくなる。

側溝に土が溜まり、水が溢れて普段流れない方向に流れていた。

家財道具を処分場へ軽トラ100回分は運んだ。土嚢袋は約1,000袋は使った。

電話よりLINEのほうがつながった。

ご高齢の方が一人で避難所に避難してきたとき、最初はとても不安そうにしましたが、徐々に人が増えてきて「ここは明るくて落ち着くね」「避難しちよってよかったねえ」と集まって話す様子が見られた。
(避難所の様子)

夜中、変な音がするなと思い、ベッドから立ち上がると

膝の位置まで水が入っていた。

驚いて扉を開けると川の水が一気に家の中に押し寄せサッシを破って大きな家具が川へ流れていった。

地域総出で土砂を撤去した。

ふるさとなくなった。

まずは**我が身を守る**必要を感じた。

山が深いので、川の水位が一気に上がり、すぐに下がる。

知り合いや同級生が泥出しの手伝いに来てくれて助かった。
本当に感謝しかない。

災害を目の前にして、正直怖かった。

道が寸断されている状況の中、**地元のことを知っている消防団**だからこそ他に道を探し、救助に向かうことができたのだと思う。



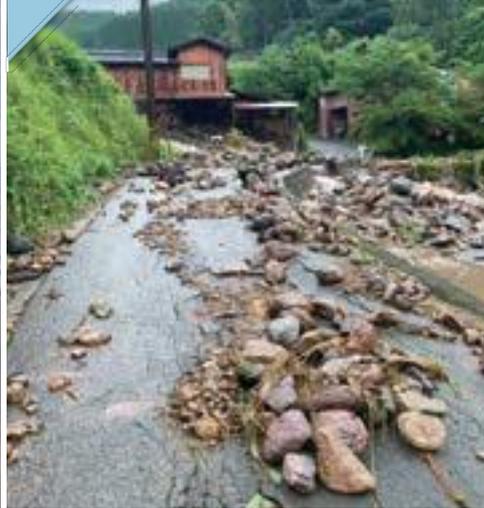
あの日

東飯田地区

野上地区

飯田地区

南山田地区









消防団、防災士の動き

災害現場や避難所で活躍する
消防団と防災士に、
災害当時の活動について
お話を聞きました。



消防団長

田吹利明

7月6日は、大雨洪水警報が発表され消防団も警戒態勢を取っていました。あの時の雨は、雨の勢い、雨音がいつもと違っていました。当時は梅木邦隆消防団長の指揮のもと、南山田地区団長として、地区内の消防団と連絡を取り災害状況などの情報収集をしていました。

災害を目の前にして何とかしなければと思ったあの日、団員達はそれぞれの仕事を持ちながらも一生懸命、避難誘導や土嚢運びなどに取り組んでくれました。人的被害もなく本当に良かったです。

私は、令和3年4月より消防団長の役職を拝命し、全団員の指揮監督をしていく立場になりました。

これから、災害はいつ起こるかわかりません。今後も、町民の安全を守るため消防団活動に取り組んでいきたいです。

各事業所や関係機関におかれましては、消防団活動へのご理解とご協力を引き続きよろしくお願ひします。また、自分も地域を守りたい方、消防団活動に興味を持っている方は、ぜひ入団をしていただければと思います。

座談会での 消防団員の声

川の氾濫により、
自宅に取り残された一人暮らしの
おばあちゃんの姿は見えるものの、
助けに行けない状況だった。
恐怖や不安、焦りでいっぱいだった。

「側溝・水路がつまって悪い
ので、ポンプについてほしい」
という要請に、多く応えた。

災害時に消防団員の命が失われるような
悲しいことが絶対ないように
「まず自分を守れ」という指示を出した。

「消防団は、なんでうちには来てくれんの?」と
言われたことがあった。
消防団が出動するには、要請が必要。

実動できる若い消防団員が急激に
減っている。救助に行ける人がいない、
小さな事案に対応できない。

東飯田防災士会

会 長 仲摩 茂敏
副会長 小幡 龍也
事務局 原田 勝美

防災士会とは、防災士資格を取得した人たちが、地域の防災・減災を目的に取組みを行う自主防災組織です。

防災士と聞いて堅いイメージを持つ人もいますが、東飯田防災士会では自分たちの出来る範囲で、身近な場所や地域の人の安心安全を確保する活動を行っています。

災害当時は、避難所の運営や地域の人が避難した場所などの把握に努めました。災害時の防災士としての立場は難しく、手探りで活動を行っています。役場の職員や消防団との役割分担を行い、防災士の位置づけをしっかりとしていく必要があると感じました。

防災士会は災害が起きる前の取り組みを重視しています。これまで被災地の視察や研修、防災訓練、災害後のボランティア活動を行ってきました。中でも、支え合い助け合いマップ作りや区長懇談会に参加し、避難時の要支援者を把握すること、各地区に最低でも2〜3人は防災士資格を取ってもらうように呼びかけ、頼れる人を増やすことを重要な取り組みと位置づけています。

毎年各地で大きな災害が起き、今後は避難する人が確実に増えると思います。人口が減少していく中で公助ばかりに頼るのではなく、自助・共助のチカラを強める必要があります。共助の支えとなり、住民を守る大事な役割を担えるように今後も活動していきます。



原田さん



小幡さん



仲摩さん



被災地研修の様子



避難所の発電機の
起こし方を研修中



災害復旧工事の現状

災害復旧工事を手がける建設業協会の皆さんに、災害当時の様子や復旧工事の状況をお聞きました。

九重町建設業協会とは

九重町内の建築と土木工事ができる会社の協会で、現在会員企業25社です。普段の建設業協会の役割は、研修(安全、工事、積算等)を行ったり、中学校にて職業講話を行うこともあります。

7月豪雨の時には建設業協会として、一刻も早く災害現場の復旧を図るために、通常業務の工事を先送りしてもらえようように要望しました。

災害当時のこと

当日は直接役場の建設課と玖珠土木事務所から連絡がありました。雨の音で寝れなかったので、電話が来て「やっぱりきたな!」と思いました。

朝になって、家の周りの様子を見ると、家はいっぱい浸かっているし鉄橋は曲がっているし、「こんなことが起こり得るのか・・・」「自然には勝てない!」そう感じました。

災害現場のこと

協会員各社は、現場を見に行きそれから必要な重機と、配置する人間の数の判断をしました。その日は各社とも朝からてんでこまいでしたね。

まずは、道路をふさいでいる土砂の撤去から始めました。その次に、河川にひっかかった流木の撤去や、土嚢を積まないで壊れてしましそうな場所を重点的に取り掛かりました。この作業をして





取材時に作業されていた皆さん



おかないと、次に大雨が来た時にすぐに河川が氾濫したり、土砂崩れを起したりと二次災害に繋がる可能性がありますからね。自分の家の近くで重機が動いたら当然、「ここのめてくれ」と頼まれます。大変心苦しいのですが、「こつちを急ぐけんごめん！」と言って断っていました。余裕があればするんですが、「先にこつちをせんと道路が通れんかったり、二次災害に繋がって危ないけん後からね、ごめん！」と言うしかなかつたです。

九重町の場合、農地の災害が二、〇〇〇箇所以上、河川や道路などの建設災害が約二〇〇箇所、そのほかにも、県道や県の河川災害が約二〇〇箇所あり、九重町の建設業者で行える範囲をはるかに超えていました。みんな、自分の周りや自分に関係のあるところが「なんでいつまでも工事できんのかな？」と思いつながら待ち望んでいると思うんですが、今回の災害に対応できる人手や能力をオーバーしている状況で、非常に心苦しいんですが、「頑張つてやります」としか言えないんです。

そんな中、野矢小学校前の道路工事に掛かった時、地元の人たちが毎日どこまで進んでいるかを気にして見に来てくれてたんです。「いつ？いつできる？」と、聞かれるのですが、とても土曜日休みますとは言えませんでした。みなさん、早く通れるようになりますのを待っていたので従業員に頑張ってもらい工事をなるべく急ぎました。出来上がったときは、感謝していただいて感謝状もいただき、やりがいを感じました。地元の方の協力があるからこそ作業を進めることができていると私たちは思っています。



九重町建設業協会 会長 河野さん

伝えたいこと

そろそろ復旧工事終わったかな？

普段通っている道をみてそう感じる方も多いと思います。けど、実はまだ仮復旧のところもあり、生活に必要なライフラインを確保しただけなんです。これから徐々に復旧は進んでいきます。しかし、またいつ災害が起きるかわかりません。

そんな中で建設業界の従業員や業者の減少が深刻化してきています。大きな災害は年々増えているのに、守つていけないといけない土地の広さは変わらない。これから先、どれほど対応していけるだろうか、最近考えることが増えました。

復旧した現場をしばらくして通ると、当時の災害の様子はもちろんですが、「来てくれてよかった、助かったよ」と、声をかけていただいた地域の人たちの顔を思い出します。

とてもやりがいのある仕事だと感じています。これからの九重町の土地を守っていく、そんな思いを持った人が一人でも増えるといいなと願っています。



ボランティアの存在

玖珠町在住 森智崇さん

様々な災害現場のボランティア活動に参加。また、「震災支援を続ける会」に所属し、災害に遭われた方へ生活用品セットを届ける活動も行っています。

これは確実に九重町に被害が起きている

あの日、今にも氾濫しそうな玖珠川を見て私はそう判断しました。

翌日からSNS等で情報を収集。九重町被災者支援センター開設初日から活動に参加しました。



九重町の状況は、これまで行った日田や朝倉の災害現場と同じ光景でした。しかし、コロナ禍とあってボランティアの条件が郡内在住者と限定されていたので、思うように人数が集まっていませんでした。気持ちはあるがどうしていいかわからない、という方が多かったですね。

持ち物や、格好はどうしたらいいのか、ボランティア活動に参加したことのない方が知りたいであろう情報をまとめた動画を作り、SNSにアップもしました。その動画をみて九重のボランティアに参加してくれた若い世代の方も多く、情報発信の必要性を改めて感じました。

ボランティアとして心がけていること
私がボランティアに入らせていただく時は、依頼主や、その日一緒になったチームの友達と笑顔でコミュニケーションをたくさん取り、お互いに話しやすい雰囲気、話しかけてもらいやすい雰囲気になるように心

がけています。そうすることで、依頼主はボランティアに遠慮していた作業のお願いがしやすくなります。また、チーム同士では細かい指示や対応がスムーズになりチーム力も高まります。

災害に遭われた依頼主が辛い現状を受け入れられていない中、見ず知らずの人たちが集団で来るわけですから、自分たちのペースでやるのではなく、依頼主の気持ちを尊重し、ご自宅を傷つけないようにどこまでも丁寧に、そして、お手伝いをさせてもらうという気持ちで活動に参加しています。

助けを求める力(求助力)

ボランティアを通して感じることもあります。それは、被災されている方が「助けて」と言えるかということ、そうではないということ。「いいですいいです、自分たちですますから」と言ってしまうのは、知り合いやボランティアに頼ることを遠慮する

方が多いようです。助けを求めることは、勇気のあることなので、大抵のことは自分でなんとかしようとはします。しかし、泥出しや家財道具の運び出しなどの復旧作業は、想像以上に体力と気力を使います。

『助けてくださいと言えた時、人は自立している』私が出会った本に書かれていた言葉です。

私たちは多くの人に支えられ助け合いながら生きています。助けを必要としている時に「助けて」と気軽に言い合える環境と関係性が普段からもっともっと地域に根付くことを願います。

九重町被災者支援センター

開設期間:7月10日~8月21日
(内、活動休止13日)

活動件数:230件 延べ
(ニーズ件数:129件)

ボランティア人数:2,291人 延べ
(個人1,065人・団体41団体1,226人)

情報提供:九重町社会福祉協議会

手記 あの日のこと

災害当時の状況や様子、そして現在の想いを綴っていただきました。

昨年7月7日 午前5時50分。

私たち家族にとって忘れもしない、忘れようとしても忘れられない一日となった。

2、3日前から雨が降り続き「またか…水嵩が増さなきやいな…」と、ひとり言。何度も裏の川を覗いた。まだ大丈夫。と高を括っていた自分。ついにその日がやってきた。午前4時に目が覚め裏の川を覗いた。ものすごい濁流の音、激しい雨、水嵩が増していた。「やばい、避難しなくては」母屋に行き、母と弟に「逃げるよ。早く荷物をまとめて」と言ったのが午前5時30分でした。準備している間に川が氾濫。間に合わない。「もう逃げるよ！」

母屋から車庫まで行くのになんと時間がかかったこと。道路に大木や土石流が流れてきて…膝まで水に浸かり、思うように足が進まない。やつとおもいで、86歳の母を車に乗せ、車は半分水に浸かりながらも、なんとか国道まで来たが、通行止めでそこから先へは進めない。とりあえず広場で2時間待機。その間、母と二人で「良かった。生きてる。」と励まし合った。待機している時に河川氾濫の怖さがよみがえり震えが止まらなかつた。

それから文化センターへ避難した。夜も眠れず、ただ不安ばかり。翌日、実家を見に行つて呆然とし言葉が出なかつた。涙も…。

頭によぎつたのは、母になんと伝えよう。家には戻れない。しばらく本当のことは伏せておこう。初めての経験。九死に一生を得るとは、このことだ。

あれから1年。家の解体工事もようやく終わったが、私たち家族は元の生活には戻れず、皆ばらばらになった。各々、前を向いて、今の現実を受け止め生きていくしかない。もう二度と災害が起こらないことを願う。

ペンネーム H・H

あの日。夜更けから尋常でない雨の降り様。5時頃、向かいのおばちゃんから電話。「もう水が道に上がつとるよ」慌てて外を見ると窓のすぐ下で川がごうごうと流れている。床下にひたひたと水が入ってくる。まさか。心臓がドキドキし出す。カップを着て外に出た。川向かいの家族は道路崩壊寸前に車で脱出。下で90歳のおいちゃんが戸を開けて立っている。水は床上に迫る。おんぶして救出。その上のおばちゃんは一人で家の上方にいるはず。水が逆巻く中、探しに行つてなんとか救出。避難所へ送り戻つてくると、三八七号線も崖崩れで不通、下の旧道も川のようになつて通れない。呆然と立ち尽くす中、ようやく雨がおさまつた。

その日は皆避難したが、続く翌日の豪雨で被害はさらに大きくなつた。川はえぐれ、道は完全に崩壊。倒木が橋を塞ぎ、周辺の家屋は半壊状態に。車も2台廃車。小さな集落、空き家含めて15軒中11軒が被害にあつた。

豪雨の最中、その後も、声をかけあい力を合わせて乗りされた。命をつないだ絆。たとえ離れ離れに暮らしても、記憶は消えない。

もうすぐ1年。

自宅前の小さな小さな小川が河川となつて氾濫。昨日の朝と今朝の変わりようは考えられなかつた。橋が流失、水道も流失、そして土手も何もない凄まじい様子に驚きと恐怖を感じた一瞬でした。思い出したくもない、私共にとつて生活上なくてはならない橋。唯一の進入路でした。迂回路もありません。全てのライフラインは打ち切られました。又、災害の朝、町職員の方が来て「農免道路が決壊しています。お宅の家が危ないので当分どこかに避難して下さい。」と注意され、大分の方に1か月余り避難。そして追い打ちをかけるかのように災害後、1か月目の8月6日に、今度は台風が来て、川端の大木が倒れて一本は倉庫の屋根に倒れ、一本は我が家の玄関前に倒れて不気味な姿のまま、令和3年4月のはじめまで、そのままの状態でした。

庭を見るのが本当に辛かつた。現在も我が家は孤立状態のままです。水道だけは何とか使えるが、住んで生活は出来ません橋がない限り。橋は命綱です。30アールの田圃も家から行き来が出来ず、休耕田となり荒れ果て見るのが辛い悲しい胸が痛くなります。

現在の河川の状態を申しますと、令和3年4月から工事が始まり関係者の方々が毎日作業に追われておりますが、場所的

にも大変苦勞されている様に思います。私も時々工用の橋を渡つて家の風通しに帰るんですが、玄関前で大型のクレーンが動き出すと地面が揺れ災害の凄まじさを感じずにはいられません。いつかこの家も地盤沈下で倒れそうなそんな予感がしてなりません。上旦の家に泊まるのも怖くなりました。

幸いにして今は町政の皆様の温かい御支援を頂きまして現在恵良団地の方に住んでおります。先日上旦に帰った時に町報を貰い、その中にB A S A R Eの応募がありましたので私なりに綴ってみました但未だ心の傷を癒すことは出来ません。

穴井スエ子さん 上旦

近年、気候変動により確実に雨量が増えたことを実感する。昭和28年の記録的水害の話を語り継ぐ人も少なくなつた。当時の様子を父から聞いていたので、昨年の水害と幾つかの共通点があつたことを思い出した。滝のような白い大粒の雨、川を流れる巨石の地響き、一面の泥の臭い、立つたまま流れる木々、田んぼを越してできた幾つもの滝の出現等々であつた。それは全く現実とは異なる光景で、とても恐怖を感じた。川の増水で庭木が次々と立つたまま流れていくのが見え「これは「大事だ!」と、初めて「避難のスイッチ」が入つた。取るものも取り敢えず表に出ると、道路は既に川と化していた。「災害はこうして起こるのか」と思いつつ何とか避難先の公民館にたどり着いた。

早朝、家に戻つてみると、床下を大きくえぐられた我が家が残つており「安心した。なお、翌日も公民館で過ごした。

これまで少々の洪水は慣れで安心していたが「水害列島日本」安心、安全な場所は一つもない!と思つた。警報は一つの目安で、避難指示が出された時は既に逃げ遅れかも!「早目の避難」「自分の命は自分で守る」を痛感した。

ペンネーム M・O 野倉

編集にあたっては、
多くの方からの

手記・写真提供に

ご協力をいただきました。

この紙面をお借りして

厚くお礼申し上げます。

誠にありがとうございます。